

## 著書回収に複雑な気分

つい最近上梓した拙著に関して珍しい事象にぶつかった。自分が書いた本になると誰でも愛着があるものだが、2月に出版記念会を催して拙著を出席者に差し上げた。裏表紙に「恵存」という文字に添えて愛用の言葉、そして署名を認めた。しばらくして知人のひとりが拙著をインターネットにより購入した。ところが、それが図らずも出版記念会の折りに出席者に差し上げた書物の内の一冊だったのである。「恵存」の文字を書き込んで手元を離れた拙著はほかにはない。知人はその拙著に自分の名前を書いてもらいたいとわざわざ持参した。代わりに新しい本と取り替え、知人の名を書いてあげたが、何か奇妙な気持ちになったのも確かだった。

近年インターネットの普及により書籍の販売ルートが拡大され、古書マーケットが拡充されたのも確かであるが、数多くの書籍が溢れる中で、一旦手元を離れた著書がこうも簡単に自分の手に戻ってくるとは実に意外だった。しかもほんの僅か2ヶ月余の間に回収されたのである。里子に出した子が歩いて親の元へ帰ってきたような複雑な気持ちと言えば、当たらずとも遠からずだろう。

有名作家でも著書が古書として店頭に並ぶと気になるものらしい。今日とは時代環境が違うとはいえ、漱石のような大作家でも一時期自分の著書を古本屋で見つけたりすると、読者に見放されたと何となく引け目を感じてそっと買い戻したこともあったらしい。

それにしても一旦手元を放れた大切なものが元の鞘に収まるというのは、奇跡に近い。初めて海外へ出かけた時、タイのアユタヤ市内で路線バスに乗り、下車時にうっかり財布、旅券などの貴重品が入っているバッグを座席に置き忘れるという大失態をやってしまった。幸い乗客や知り合ったタイ軍人らの温かい協力でもまもなくして取り戻すことができた。

もっともこれは単に自分が間抜けだっただけで、著書の回収とは話が違うか？

(近藤)